

創立以來、同表副同長顧問

同長名

副同長名

顧問名

藤千夏太郎

前川守城

宮所栄八

柳 琢郎

江木又吉

木本隆雄

前川守城

榎本榮一

木本又吉

阿部聖太郎

江木正之

榎本榮一

藤千 保

榎本善三助

前川 季

佐野善三助

安宅秀雄

藤下高郎

藤千 保

森川定雄

創立以來、理事

校内理事

大西文吉

佐野善三助

榎木利夫

垣脇守美

森川定雄

松田千秋

藤千 保

岡本恒雄

創立以來、理事

校内理事

大西文吉

佐野善三助

榎木利夫

垣脇守美

森川定雄

松田千秋

藤千 保

岡本恒雄

創立以來、理事

校内理事

大西文吉

佐野善三助

榎木利夫

垣脇守美

森川定雄

松田千秋

藤千 保

岡本恒雄

創立以來、理事

校内理事

大西文吉

佐野善三助

榎木利夫

垣脇守美

森川定雄

松田千秋

藤千 保

岡本恒雄

校外理事

川崎一郎

榎本良夫

江本 桂

榎原如一郎

岡本為一

榎 啓大

榎本定雄

津澤正之

榎原伊平

榎本重吉

山岡定吉

金本 茂

岡本利雄

阿部一二郎

金一 徹

奥津隆雄

佐古善次郎

各支部創立年月並、歴代支部長

上組

佐野 隆彦

中西 水二

西組

丸目 眞雄

下組

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

不明

山原賢 田長壽郎 谷川重郎 川原恒一
 岸上力 樺本木一 水野重雄 杉山輝一
 佐野隆夫 岡本清次 森本義夫
 岡本重雄 村松守平
 谷口良二 山本豊一
 池本道男
 全不茂
 秋岡宗次
 藤原一留
 藤原政博

本回主要事業

1. 修養上の施設

a. 總會日 定期總會(春季) 臨時總會(開) 噴議、各士講演、操縦青年、推展支那事務、同員
 研究會等々ナシ、同様の訓練ヲ行フ、

b. 青年学校 後援會ヲ設ケ、本回ト青年学校ト、連絡ヲ一層密ニシ、生徒、就学出席、奨励コト
 又、

c. 一統講習會ヲ定期開クニシテ、同員意見發表、報告會、吟誦、和歌朗誦、青年休
 養、唱歌練習等ヲナス、

d. 雜誌發刊 1. 毎年ニ回被開張「朝」ヲ發刊シ、各士全集、投稿及青年團、青年学校ノ開キル記事
 2. 場載ス、

e. 講習會要請會次進リ、部、他所行ニ於テ同僚ナル、講習ニハソ、初限可成多數補助ヲテヘ
 出席セシム、

f. 青年学校 夜間講習ニ參加スル外、夜間、夜間、ハ直井同格ニ補助ス、

各年一以上ノ優良青年團、視察ヲナシ、操縦權ヲ全クナス、

長ニテ才教育、實地ニ因リ離レ住民ヲ育ムル人、為前年ナリ法則、改良、選考智識、所ナ
 カナシ、善長ナリ公民ヲ養成シ、農村、改善操縦ノ開ル、

1. 巡回文庫、設置ヲナシ、文書及書、振立ヲ開ル、
 2. 雜誌、青年ト購読奨励
 3. 海軍大会、同僚ト辯論、練習、

4. 青年社 修業、

a. 進路指導 修業、

b. 修業 記念日、時教、新聞記事宣傳
 c. 青年学校 手傳
 d. 神宮祭典、新聞
 e. 地盤動勢ト消行、新聞

f. 進路指導 青年會同僚ニ年ニ回、同主催トナリテ教育的映画ヲ町民ニ公開ス、
 7. 入選官兵、秋送迎、

8. 産業的施設

a. 青年学校 1. 定期開クニシテ、操縦試驗場、他是進出、業手視察ヲナス、
 2. 製作物、副業品展覽會、製作品優良品評會、十一月、青年学校ト共同主催、下ニ行ス、

同僚ヨリ一画新種整等々其、修養、學ヲタル青年唯一、夜櫻場ヲラレノ出部者ヨリ大々如ク
ナリ

明治四十一年春以氏朝鮮、移住ヤレ籍任前川守成氏合ホトナリ、是ニ由、神南東ニ因リ本立青
年会ト改稱合場ヲ入格後町本園村ニ移レ、組織ニ変更修養ニ河内、中河内、若下、小島、池
野ニ別ニ夜賀ヲ置キ之ヲ要員ト命ジテ

明治四十一年八月總會ニ於テ會場遷止、併ニ之ニ會費ニ意見、相違ヲ決シ北東ニ藤平居一火
河文次、郷幸吉、柳國平、宮本芳太郎、前川進雄、樺本直平、諸氏ニ送ニシテ、持論ヲ陳シ北ノ
年ヲ、傳統の跡ニ藝術を施シ一財廢止ヤレタリ、

然ルニ翌年二月トナリ金額漸止、為唯一、夜櫻場ニ朱ヒ青年、意氣奮ラザルノ故ヲ以テ除事前川
進夫、宮本芳太郎、西氏、善業ニテ青年志願ヲ催スコト、ナリ八月十九日高橋才ニテ同僚セリ、
某、數ニ後前進リ合会ヲナシ、武道、煙草、讀書身法、修練ハ行ハレ、財ハ別進業進、持術等
ノ師範ヲ聘シ合會コレニ心身、訓練ト技能、習熟ヲ圖ラシム

明治四十一年十月十七日三原郡長、來臨ヲ得テ小学校ニ於テ前青青年大會開會同僚一ガリ之
ニ参加上總委員、手ニヨリ門前、ア、ナコ作ル、全打青年、集會ハ其ニ之ヲ以テ滴矢トス、
明治四十一年ヨリ土組青年會主催ニテ各部宿ニ迎同講義會ニ同僚前各都府ヲ迎同講義セリ、
講義者ハ打長小学校教職員上組青年會員ハ前川會長、江本向島、森山隆ニ江本貞夫、前川進雄、
宮本芳太郎、村本高平氏ニコレナリ

同年十月、前高村反上組青年會共同主催ニテ前青青年大會ヲ催シ、講義會ノ後八幡境ニ於テ
北所屬トシテ抗擊劍試合ヲナス、

明治四十一年一月宮本、前川進雄氏ノ首唱ニテ圖書被同設、有志ニ書籍、書籍ヲ購ヒ書籍ス、
今年三月築島、八月藤平多一氏ヲ聘シ劍道並ニ柔道、格闘ヲ教ク、
大正元年十一月ニ至新武徳會主催武術大會ニ前川、宮本氏ヲ派遣

大正二年三月總會ヲ開庭、合則ヲ變更シ、合費ヲ十五元以上ニテ二十以下トシテ新制度ヲ定メシ
産業部、學藝部、武術部、技藝部トシテ、理事ヲ部長トシテ分掌部員ヲ計ラシム、
同年四月十七日八幡境前ニ於テ上組青年會主催前高村費無着相違案ヲ舉行ス、

大正三年六月廿日新工部氏唱導ニヨリ産業部主催トナリ上組字番ニ試作圖ヲ借受ケ、稲作品種
試験、肥効、植方等、試験ヲ著作ニ於テハ班葉病、蒸穗病、麥吸ノ予防ヲ共同実験スレト共ニ
新落内空地ニ桑畑ヲ植栽ス、

大正四年九月大暴風、為老松、本領竹ニ倒シテ、リ合場ハ倒壊シタルヲ以テ前大興社合事業ト
シテ八幡境前東側ニ公會堂建設ナルコトヲ期トシテ前川進雄氏引退ナレ江本正之改稱性ナル、
會員、併合トテ學部、健康、体育部、活動ヲ圖リ會計部ヲ新設シテ専任出部ヲ掌ラシム、又合
名ヲ本立上組青年會ト改稱、更ニ其後上組青年會トス、當時ハ三都府ニシテ教育、體育、會計
ナリナリ

後前ヨリ前高村青年會ナルモノアリシニ、併存統一ノ觀上リテ前コト、部毎ニニ結立定意ニ所ク
ナリ

レモ、新ク、コノ價ヨリ、市庁青年会ヲ統一シテ組織、増進ヲ計ル機運ニ際会シ、青野協ニ何兩村
青年会ノ一支部トシテ組織サレ、コト、ナリ

第一団体育運動会ハ大正四年迄、テ開催サレ、水支部モ之ニ参加セリ、支部ト改稱後ハ会場ハ草
二青年集會場トナリ、創立當初以來、毎夜隨意ニ尋合ヒ俱樂部クル特賞ヲ受ケ、至ル

(宮本才太郎氏稱ヨリ)

婦人會

創立 大正十一年七月十七日

奉彰 昭和八年十一月十日生活改善同盟會ヲリ、生活改善ニ努力セ、實行ヲ促進シ社会
民衆ニ裨益スル所多クナルヲ以テ奉彰サレ

主要事業

八勤検貯金 本会創立以來、毎月十銭以上各会員五ヶ年間共同積蓄トシテ積立、昭和二年九月
第一日満期、積立金九千八百余円、昭和七年九月第一日満期、積立金一万五千八百余円、而シ
テ現在第三日満期、積立金五千中也

八愛國貯金

御大恩記念トシテ、昭和二年十一月ヨリ、毎月三十銭以上六十ヶ年積蓄貯金トシ、九年十月
満期、九千百丁日、月金ヲ抽出シ、第一日、日経簿中ナリ

八出生貯金 斯會獎勵、為會員出生時之ヲ祝ヒ、トシテ支部ヨリ十銭乃至二十銭預入シ、
全通帳ヲ贈ル

八敬老會 昭和十一年創立當時、後會員一於テ敬老會開催ノ決議ヲナシ、當時會員全體ノ勤勞
所ノ寄附ニヨリ、第一回敬老會ヲナシ、會員ノ調理ニナル酒銀ヲ使シ、種ニ會費カナク、
以來二年乃至三年毎ニ開催ス、
ニ基テ貯蓄積立

八御成婚記念 大正十三年一月ヨリ、有志會員毎月金一銭先十ヶ年間積立積立、及ビ寄附
金、一部積立、以テ昭和九年ニ至リ、千五百圓一十月ニ達シ、以テ、利息ヲ以テ會員
持活動ノ資トス

八會費ノ制定 儲蓄月勵行ノ為、及ビ會費ノ容易ナラシムル為、黒色綿布會服ヲ制定、正服トシ
ニ會費ノ時及團體行動ニ着目セシム

八國體揚揚

皇太子殿下御降誕記念トシテ、八幡宮境内ニ國體揚揚會ヲ奉納セリ、祝祭日、民博祭典、國
體記念日、入退會者奉告、口頭ヲ揚揚シ、會費之ニ奉任ス

八治水法改善 雨水ヨリモ井水ニ完全ナル蓋ヲナシ、揚水スレバ、夕ハ二時クテ或シ得ル、三十

精細、... 各都府省長官... 毎月五、二十日小学校... 新嘗會子ノ華成

武進實地... 海運... 十月一日... 十一月一日... 十一月十日... 十一月二十日... 十一月三十日... 十二月一日... 十二月十日... 十二月二十日... 十二月三十日

十一月十日... 十一月二十日... 十一月三十日... 十二月一日... 十二月十日... 十二月二十日... 十二月三十日

五表彰史

小阿嵩町ノ孝子

○榎本ふき 松山政藏長女ニシテ、母ハ松山シヅトイフ。

榎本藤太郎ノ子才一兵衛及比叟介（後輩トナル）ノ妻トナル。藤太郎死シテ其未七人ハ人ト爲リ余リ良カラズ事毎ニふきヲ責ム、ふき深ク存養ヲ盡シテ倦マズ。前賢才一兵衛ノ妻ノ子才二郎家ニ在ルヲ實子ニ優ル愛情ヲ以テ之ヲ導ケリ。其存道ト貞節トハ、水ヲ後人ノ模範トスルニ足ルヲ以テ遠ニ松平河波守ヨリ前後三回ニ直リ褒賞ヲ戴ケリ。其節當百錢四十ヶ、書物一通及ビ類々物等ナリレカト失レテ傳ハラズ。

○里口セも 明治四年里口萬四郎ノ長女トシテ生レ、家貧ニシテ然モ兄弟多ク、其上ともハ六才ノトキ不幸天然痘ノ爲盲トナル。こもハ幼時ヨリ不具ノ身モ厭ハズ、妹ノ介抱ヲナシツ、強依ノ賃傭シ、或ハ米搗、粉挽、抄摩ニ雇ハレ一家生計ノ世腕トナリシガ、父ノ老エルニ隨ヒ病者同様トナリ何一ツ仕事ハ出来ズ、ソノ上母ハ失明同様、妹ハ日ニ病弱萎ルノミナリシモ、こもハ益々仕事ニカメ妹ヲ看護シ、父母ハノ存養ハ年々ニ厚ク毎夜寝ニ親ク前、必ク老父母ノ安否ヲ正シ、抄摩ヲ十分ナシタル後始メテ床ニ就ク有様ナリト、三十年苦シミシ妹ハ死シ、父ハ九十三才ノ長命ヲ全ウシテ續イテ去リシ後ハ、寧ラ母ニ仕ヘリノ存養ニ感ゼヌモノナカリキトイフ。

母ノ死後養子ヲ迎へ、昭和六年六十一才ヲ以テ永眠スルマデ一日、如ク、存養ト家名ヲ傳フ

昭和八十一、十、生活改善同盟会、生活改善、智ノ其、習ヲ行ハシテ進ニ社会民衆ニ裨益多ク
女子青年團

昭和五、十、二、原野女子青年團、原野利用厚生會、出品成績良好
支部

聯合團體

十二、九、四、六、佐野村婦會、西原婦長、米作所事トモ相獲、
九、二、二、上郷婦會、春日野婦長、花石米林、米作所事トモ相獲、
一、二、二、二、佐野村婦會、米作所事
一、二、二、二、佐野村婦會、米作所事
昭和六、二、二、佐野村婦會、米作所事
三、三、三、西原、米作所事
四、三、三、東組、米作所事
五、三、三、火上、米作所事
六、三、三、下組、米作所事
青年團關係
大正八、一、一、東組支部、青年團長、成績顯著
十、一、一、佐野支部、米作所事トモ相獲

個人表彰

昭和表彰規定ニヨリ表彰

昭和四、三、二六、江本 崇、父母ニ孝、宗系ニ精勵
五、二〇、藤上ともし、節、婦
七、三、一〇、江田唯夫、勤勉、節約、存行
八、三、三、興津 連、青年ニ模範
九、二、一、秋間清市、役場使下トシテ忠實
九、二、一、武田武吉、善配人トシテ勤務精勵

大正十一、十、十三、九田支部、青年團長、修養ヲ怠ラズ、協同事業ニ努力
十五、六、十、上組、生活改善同盟會長、時、宣傳功勞者
西組、
元田、
昭和四、六、十、下組、
八、六、十、東組、
佐野、

横尾清彦等

大田吉三 藤原盛吉 河部久八 河部丑藏 前日鏡市
 津下盛平 宮川勇一 中野貞一
 櫻井重彰 昭和十二年一月十日
 榎本及四郎 大田吉三 河部龍市 菅盛木 松手氏一
 藤世芳一 大田吉三 榎本重市
 大田吉三 河部龍市

帝國教育勸進人 志事ヲトシテ功勞著シキ者ヲシテ
 合 櫻井重彰トシテ表彰セラルル也
 菅本常平 大田吉三 菅本芳太郎 本藤國八 松手常平
 本藤梅郎 大田又一 榎本重吉 森下定三郎 谷口建三郎
 村上新一郎 石山 茂 菅本重吉 河部龍市
 田中惣七 菅上守文 藤部新次 菅本及四郎 河部龍一
 松手龍一 西下勤太郎 河部龍市 江本及四郎 藤井慶郎
 前川孝平 湯古常吉 榎本保夫 松山重吉 尾山初花
 西中三吉 金一 榎 菅本晴市

附

河島尋常高等小学校職員

現在職員

岸上岡市、村上謹一、西野盛栄、菅井太郎、武田元保、森川定雄、野口長八、柳原茂吉、藤平祐二、岡本恒雄、宮本初枝、山崎水子、前原金藏、宮本及四郎、中野一夫、(正倉銀山、田井及三、以爲職員(赴任順))

河島小学校 山内忠八、江本力太郎、高日浦一、賀喜輝吉、榎原重藏、山岡三平、堂水芳三郎、河村琢道、玉井晴藏、江本達太郎、岩井権太郎

新築支校 沼田長吉 堂水秀太郎 戸田益吉 沼田秀太郎 榎本大郎 岩井守吉
 塩屋支校 榎原重藏 藤本喜八 叶又吉

階明支校 柴嶋 鏡 船上げ吉 西本茂吉

福日簡易小学校 江本力太郎 沼田秀太郎 河村琢道 谷川嘉七郎 金山又七

福日尋常小学校 榎原重藏 福山重平 石田浦太郎 江本力太郎 岩井長太

本庄簡易小学校 河村琢道 金山又七 江本達太郎

本庄尋常小学校 (後二本庄尋常高等小学校、更に後二河島尋常高等小学校)

江本力太郎、榎原重藏、河村琢道、江本達太郎、奥野多喜太、沼田長吉、菅本及四郎、奥澤藤吉、沼田忠三、南又吉、早瀬和一、菅本藤松、原口作平、船越レウ、榎本及四郎、平田

大藏 中野寺三郎 小泉権平 渡本一郎 岡本長七 折野仁左工門 乃美二七 楠青一
 蛇持真次郎 岸上岡市 藤澤由繁 橋下計郎 木左駒夫 別所春平 橋本玄八 森順平 安宅常市 善田佐平
 厚美直七 河瀬正三 菊川貞助 沼田忠三 林梅一 岡中菊平 八木田豊一 山田八八 田岡鶴田 中田長
 平 大岡三三 倉本佐代太 安田梅三郎 坂本豊吉 谷田忠平 坂上三三 宮崎虎八 澤田大六 数
 田吉三 天桐祐郎 前田六一 高田八助 原口ハハ 岡本政次 即馬升原一 岡本長七 渡野常吉 藤植三工
 坂上ハハ 宮本利喜 安宅常市 佐野善之助 安富安平 野上藤平 中村才藏 兵津幸吉 佐江藤藏 木左
 又吉 津田哲三 坂本平三 野野菊平 坂上三三 安宅秀雄 赤坂豊助 木本義一 渡辺儀三郎 天羽松
 郎 大西文吉 紅藤政男 入谷輝一 岸上岡市 沢田仁右工門 石田健吉 土井米市 櫻井三三 佐野善之助
 以藤喜一郎 橋本彌三郎 上村三三 野河虎夫 岡本政次郎 坂本儀平 武岡仁右工門
 木左権 藤森藤平 平田一郎 藤本高郎 宮本ハハ 細谷三三 垣根安美 高田道文
 山本正弘 前原平一 船越王雄 垣根常夫 多田寅男 不動佐一 賀集邦男 櫻井三三 原口俊介
 溝口一平 渡野六一 若城儀三 宮田哲郎 渡本利男 奥本昌一 渡本佐代太 谷口三三 橋本八
 童子 江本武夫 中村新吉 本目ハハ 櫻井哲吉 武市真市 岡田久男 藤平祐二 岡本長七 渡
 野鶴吉 垣根等美 竹田薰 滝川一夫 田井八郎 本田政義 長川まさの 比井圭二 尾崎稔 岡本利
 権 尾井堅三郎 坂本義廣 前田謙吉 藤下政夫 西野久子 櫻本実 本田量一 橋本末雄 村上謙一 倉
 成茂 磯井孝也 高鍋三平 榎村義保 前川崇一 菅野清隆 栗野久太郎 津田長哉 各々一 木本正雄 山
 下晋一 橋目介哉 江本正巳 谷口三三 多田昇 藤田公介 崎山謙三 栗原大 池上勤 原目三三 橋
 田茂秀 木左清堂

産 業 篇

産業篇

第一章 農業

一 稲作

本町稲作改良、奨励手組エラレルハ大正三年以降ニシテ、村長兼農会長野原助氏ニヨリ開始セル。多収獲競進會、先進地視察員派遣、肥料塩水送、改良揚床苗代、奨励ヲナシ、他町村ニ率先シテ大正五年村農會ニ兼任技術員、設置ナシテヨリ、卸米農會、設立其活動ト相俟テ着々改良、実績挙げ来ル。明治時代ハ收量及普通五俵代（一俵五斗入、明治四十二年米價激直實地ト共ニ四斗俵トナル）ト称シ居タルが大正、中葉ヨリ昭和、初年ニ至ル頃ヨリ三石代ノ普通トスル増收ナシニ至リ縣下有數、稲作地トシテ本縣下ニ於ケル帝國農會ノ稲作視察、指定地トナル。續イテ昭和七年本縣稲作改良競進會ニ於テ本町ヲ代表シテ出席セル櫻水貞次氏ノ稲作ハ一筆、榮冠ヲ得、本町ニ對シテハ知事ヨリ農務課長、光榮ヲ受ケ、本縣視察、權威トシテ縣ヨリ折紙ヲツケラレ今日ニ及ベリ。

ニ本町ニ於ケル稲作ノ發達

ハ苗代、改良

- (一) 選料苗代 明治四四年頃ヨリ優良種除、必要上縣令ヲ以テ回天橋ノ種再育ニ決定セル。
- (二) 揚床苗代 大正三年ヨリ從來ノ水苗代ヲ改良苗代ニ奨励ナレタルモ、煤炭ノ被害ヲ恐レシ實地ニ於テハ、先ニ北嶽處ノ地減シタル大正十年ヨリ急激ニ増加、昭和五年ニ至ルナリ

3. 病害防除
 (一) 猝倒、発生 昭和十一年全町に亘り大発生一割以上ノ被害ヲ受ケ疎ニ耕日ニ多クナリキ。

(二) 白葉枯病、発生 毎年発生大ナルヲ以テ大正八年ヨリ各部茶農會ニ所寄具ヲ備ヘ付ケ本年
 夫砂糖ホルドノ液ニヨル共同防衛ヲ構シ苗代、改良ニヨリ大正十五年以來其発生ノ跡
 ナクナルニ至ル。近時時折発生ノ何アルモノ一局部ニ限リ其被害又輕微ナリ。

(三) 新葉枯病 昭和ニ入りテヨリ白葉枯病、後ヲ受ケテ瘠地ニ多ク天候關係ニヨリ大発生
 ナルニ至レリ。ホルドノ液撒布強湯浸法葉取浸種等ニヨリ豫防ヲ講ズルニ至レリ。

(四) 縮熱病、発生 河原、佐野、中西、丸田、東組等ノ山間部ニ於テ年ニヨリ縮熱病ノ発生ナリ
 受ケタルモノ年々漸ク其発生ヲ見大ニ然レ共穂首、イモノ病ノ被害ヲ受ケルコトアリ。

(五) 田植、改良 定規使用正條種トハ及損除草ハ明治廿三年創始ナレ、明治廿七年ニ亘ル間
 ニ於テ改良普及ナリ。明治廿八年六月、川辺郡ノ需ニ應ジ本町ヨリ早乙女江本たつ外十
 三名正條種實地指導ニ赴キ、又明治廿九年六月ニハ災害即ヨリニ招聘セラレ早乙女安田ヨ
 ク外十七名同地ニ赴キ正條種ノ指導ニ當リタリ。

(六) 品種 明治十年本町丸尾聖次郎氏ニ依リ選出セラレタル神才種漸次普及シ、作付ノ大部
 今ヨリ未リタルモノ大正十年頃ヨリ漸ク普及シ、大正、晩年ニ至リ廢ル。朝日種ハ大正八年
 頃ヨリ栽培シ初メ品質改良共ニ他ノ品種ニ優レ居ル為ノ急激ニ増加シ大正晩年ヨリ昭和初
 年ニ亘ル間七割以上ノ作付ヲ見シ、現在ニ至リタルモ連作ニヨリ近時ニオヒム傾向アリ。

且つ昭和十一年ノ猝倒ノ被害ニヨリ他ノ品種ニ轉換セントスルノ氣運アレドモ之ニ代ルベキ
 有學品種發見セラレザレ現況ナリ。

6. 天災ニヨル凶作
 (一) 昭和十七年九月出穂期ニ大暴風ナリテ收穫倍率ノ所ナク即落毎ニ割ノ故出シオシナリ。

(二) 明治廿六年大旱魃、上畑ノ大圃(千石圃)決行、雨乞祈願オナク。初年度ハ降雨多ク
 二年百八降雨少量ニテ旱害大ナリキ。

(三) 昭和九年七月廿一日大暴風雨、全十年畑害被害、全十一年猝倒、被害ニ依ル連續的ノ不
 作ニ續キ、昭和十二年九月十一日(二百二十日)大暴風雨、潮風ニヨリ出穂ノ花掛、最
 中ニテリシ稲田八百石圃ハ黒穂ト化シ收穫倍率、又、下リ明治十七年以來五十三年月
 一風害ニヨル凶作ヲ現出セリ。

7. 所屬會多收穫競進會 一筆度實看並ニ成績

年度	大正三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年
出品人	安宅彦平	櫻田長策	園生利吉	江本今平	櫻田長策	若井武平	森本長次	小原吉太郎	高藤藤吉
收穫量	四、一〇〇	四、一五八	四、一四〇	三、五一一	三、七七一	四、五二一	四、六五九	四、九四八	四、六六二

8. 増収比較
 改良獎勵前(自明治ニ至大正四、五、六)
 改良獎勵後(自大八至昭和二)
 二石九斗五升
 二石三斗二升

本町(玉葱)適地適作を得、自費投資夫ニ他地方ニ是後、許ナク全農ニ冠ルル好適地園栽培地
アリ、猶又本町農ノ所ニ出荷港ヲ控ニ運賃低廉ニシテ販賣上有利ナル事ト指儀ツテ著述年ニ於
テ又支作ノ二倍、米作以上ノ利益ナリ且ツ厚ハ米作ノ五倍米及ノ倍額ニ期望スルノ好況ニ違
過シ、本町農家ノ経済ヲ潤ハ事多ク大ナルモノアリ、作付ハ全農家ニ及ビ其面積今ヤ(昭和十二
年統計)百四十町ニ達シレハ、百貫ノ生産ヒントスルノ盛況ニ至レカ所、一大生産物ナリ、
自費家ニ於テ毛輸出玉葱ノ販路擴張ニ伴ヒ有利ナル作物ナルヲ説ハザル所ニシテ本町経済更ニ
ハ一ニコノ玉葱ノ増産ニナリト期待ナリ。

四 結 算

(一) 第一次栽培(明治三十九年) 昭和十三年 昭和十三年 昭和十三年 昭和十三年
リニテ止ム。第二次明治四十一年 昭和十三年 昭和十三年 昭和十三年 昭和十三年
リ栽培者數在ニ増シ、ニ反シテ、作付ナリ。

(二) 町農會ノ獎勵 大正十一年五月、九名ノ職員員ヲ選出シ、即ち此ノ職ヲ
九月二十三日泉州ノ清水富平津野藤太郎兩氏ヲ聘シ、講義ニ指撥、實地指導ヲ受ク。

(三) 作付減少 大正十二年阪神市場ニ共同出荷ナリセリ又、収益支作ニ比レテ為リ、獎勵第一年
次ニ町大反ナリレハ一年限リニテ中止スルモノ多ク、二年次ハ僅ニ盛産地ナリニ上組下組
、三節若、一部農家ニ減少ナリ。

此後栽培地 大正十四年頃ヨリ富貴農家ナルコト市場ニテ認めラレ且ツ栽培技術ノ向上ニ伴

七、以當七百貫ヨリ十貫迄ノ。増産、最前年ニ百貫位、收穫ノ率ゲムニ、出テヨリ、噴ヨリ、
作、二倍以外ノ利益ヲ得ルニ至リ、栽培面積五町歩以外ニ増加ス。

(四) 全部若ニ普及 昭和十二年百貫作本町ノ最盛ナルモノ、唯カトナリタル為、町農會等ニ次獎勵
栽培地ナシシタル村、物々金山ニ移シ、全部若ニ作付普及シ、一層十七町田良ニ栽培シ、
栽培地ノ改良 大正年間ハ泉州式ニ尺八寸ニ條條間五六寸ナリシモ、昭和二年全部若ニ若
及ト同時ニ田尺既四條田才間隔、密植トナリ、為メニ收穫ノ率以外ヨリ千五百貫、二千貫ニ及ブ。

(五) 出荷組合設立 昭和三年度ヨリ出荷組合ヲ設立、各節若ニ支部ヲ設ケ個人賣才禁リテ統制
販賣ヲ種ニス。

(六) 玉葱賣金時代出現 昭和四年度收益度最高三百圓以外平均百八十六圓、費十圓餘、當時支
作、四倍、米作ノ二倍ニ合ニ相當スルノ、黃金時代ヲ現出シ、其年四十九町歩作付ニ躍進ス。

(七) 暴落不況時代出現 昭和六年暴村恐慌時代、出現ニヨリ、農産物價ノ暴落且ツ玉葱ハ生産過
剩ニヨリ、価格初、價格十大貫位三十八錢九月ニ漸クニ一圓トナリ平均費三錢五厘、其年ノ
作付三十九町歩ニ減少

(八) 播種園ノ設置 種子ハ農會ニ於テ泉州並ニ和歌山縣ノ生産者ヨリ共同購入ナリ、ナリ
タル所、昭和五年度ヨリ和歌山縣長岡村ニ専任播種園四反歩ヲ設ケ種實ナリ、優良種子ヲ得ル

(九) 出荷港ノ整備促進 昭和五年出荷港ヲ備ヘシテ、輸出困難仲仕賃高價ナリシヲ以テ、玉葱多
量輸出ニ伴フ所、輿論トナリ、東道旅客ニ事ト同時ニ西垣原、泉坂、切下、新置場、設置ト

平均	米	麦	平均	米	麦
	二、四七三〇	二、八九九〇		一、一四七三	
	三、一八五	六、七、六二〇		二、三、九二	

丸藤菜

明治初年より現在に至る迄本所ニ栽培ナレ、蔬菜ハ其種類ニ於テ大差ナク、大根、ホウレン草、春菊、葱、分葱、高菜、牛蒡、人参、茄子、胡瓜、南瓜、越瓜、里芋、甘藷等ナリ、西洋蔬菜ニ於テハ明治中葉ヨリ馬鈴薯、玉葱、甘藍ヲ栽培スルニ至リ、蕃茄ハ昭和ニ入り少量栽培ナルニ至ル。西瓜ハ明治中葉ヨリ大正末迄中西ニ少量栽培ナレ居タリレガ現在ニテハ少量各都府ニ栽培ナル。水町、養菜造成管科栽培ニ既テハ他縣ニ比シ甚クシクナリ、漸ク昭和ニ年頃ヨリ下組青年木不産秋石ノ菜、胡瓜ノ早熟栽培ヲ始メレニ始マリ現在相當範圍ニ蔬菜類、蕃薯等、半收成ニ成功シ相當、實利ヲ奉ケル、ナリ、上組銀山等、博ノ両山モ早クヨリ蔬菜類トバト、南瓜、胡瓜、茄子等ノ早熟栽培、實行奨励ヲ行ヒシ處ナリ、現在本町ニテ自給ニ居ル蔬菜ハ玉葱、里芋、馬鈴薯、葱等ナリ。其他蔬菜類ハ本所、消費ヲ充テ得ズ他町村、河波等ヨリ移入ナル、現状ナリ。

二、蔬菜栽培ノ推移

年度 廿 蒲 南 鈴 薯 大 根

年度	反別	收穫高	價格	費當値	反別	收穫高	價格	費當値	反別	收穫高	價格	費當値
明治四〇年	一・一	四、〇〇〇	一七六	四	一・〇	三五〇	一四六	四	一・〇	六五〇〇	三五〇	四
大正三年	一・五	六、二〇〇	四三四	七	三・〇	一〇、五〇〇	七三五	七	一・三	一、七〇〇	三五〇	六
昭和元年	一・五	三、〇〇〇	六六八	二	一・五	四、五〇〇	一三五〇	三	一・〇	一、七〇〇	七〇〇	一
五	八、四	三、六〇〇	三三六	一〇	二、六	一、四〇〇	一五六	一五	一・二	三、〇〇〇	五五五	五
十	九、二	四、九六八	六九五	二四	三、五	一、七五〇	二九七五	一七	一・三	一、五五〇	七、三六五	七

一、果樹

明治四十年頃中川大平氏ニ依リ大規模ナル畑地ノ柑橘園、山林開墾ニ依リ梨、桃園ノ開墾ヲ見タルノ始メ數氏ニヨリ引續キ果樹栽培行ハレ現在ニ於テハ藤花園ソ、他十數氏之ヲ經營者ヲ見、柑橘、桃、柿、梨、栽培ヲ主トス、コノ中本町消費ヲ充テ得ルハ夏蜜柑、柿ニシテ他ハ移入ニマフ、一ニ果樹栽培ノ概況

年度	梅			桃		
	樹數	收穫高	費當値	樹數	收穫高	費當値
明治四十年	五、〇	三、〇	二、四〇〇	一、〇	一、四〇〇	二、八〇〇
大正五年	一、〇〇	五	四〇〇	八、〇	二、八五〇	六、五五〇

大正十年	一〇〇	五	一〇二一五〇〇	二五〇〇	三〇〇	三〇〇	二五〇〇	一六四〇〇	・七〇
昭和元年	九五	六	一五〇〇〇	二五〇〇	三〇〇	三〇〇	二八〇	一一二〇〇	・四〇
〃 五	一〇二	八	一〇二〇〇	一五〇〇	三〇〇	三〇〇	二一八〇	二一八〇	・三三
〃 十	九〇	六	一〇二〇〇	一七〇〇	三〇〇	三〇〇	三三六〇	三三六〇	・四八
明治四十二年	樹數	批	價銀	費當値	樹數	批	價銀	費當値	
大正四年	一〇〇本	二〇〇	四〇〇〇	・二〇	一五〇	二〇〇	六〇〇〇	・三〇	
〃 十二	六〇	八	二六〇〇	・四五	六〇	四〇	四四〇〇	・一一	
昭和四年	一〇二	一六	四三〇〇	・三三	一〇〇	二〇〇	一〇〇〇〇	・六〇	
〃 十	一二〇	二二	五九〇〇	・三七	九〇〇	一四〇〇	四〇〇〇	・三〇	
明治四十年	五〇本	一〇	三〇〇〇	・三〇	五〇〇	一〇〇	九〇〇	・〇九	
〃 四	一五五	五	七五〇〇	・一五	六五〇	七五〇	一八七〇〇	・二五	
大正五年	一八〇	五	一六二〇〇	・三〇	四五〇	七五〇	七五〇〇	・五〇	
〃 十	一七〇	五	二二五〇〇	・四〇	四五〇	一〇四〇	一〇四〇	・三七	
昭和元年	七二五	一八	七二九〇	・四〇	九三〇	二八〇	八四〇	・三〇	
〃 五	七四〇	二一	八四〇〇	・四〇					

昭和十年	七五〇	一九〇〇	五七〇	・三〇	一五五〇	二五〇〇	一五〇〇〇	・六〇
明治四十年	三〇本	一〇	一〇〇	・二四	二〇〇	三〇〇	三三〇	・一一
大正三年	四〇〇	八〇	一九二四	・二四	二〇〇	八〇〇	八〇〇	・一〇
〃 十	三〇〇	一〇〇	六五〇	・六五	二〇〇	一五〇〇	五二五	・三五
昭和元年	二二〇	五	一八六	・三五	一〇五〇	二八四三	七〇七	・二五
〃 七	二九八	七	一四六	・二〇	一〇九〇	五五二〇	四四二	・〇八
〃 十	三三〇	〇	一九二	・二四	一三五〇	六七〇	七三三	・一〇
昭和元年	四八五	一七	六九六	・四〇	一八五	三〇九	六〇	・二〇
〃 五	五〇八	一七	五三五	・三〇	一八五	二九五	二〇	・一〇
〃 十	五六〇	一九	五一八	・三七	一八〇	三三〇	二〇	・〇八

一、花井栽培
 昭和六年藤花園ニ於テ果樹園ノニ蜜利所ノ止場ヨリ
 開作トシテ数種百合栽培ヲ開始シ 漸次アネモネ、ガラオラス、アスター、夏菊、洋菊、高砂百合等
 ニ蜜利栽培ヲ擴張ナル。昭和十一年ノ頃ヨリ生トシテ是等花々球根ノ繁殖栽培行ハレツ、アリ、

徳島前、明治初年以來、上垣河以蘇北國ニ於テ、系樹用ノ開作トシテ、十フラン・ニンニク、ノ營利栽培行ハル。昭和三年より上垣河以蘇北國ニ於テ、系樹用ノ開作トシテ、十フラン・ニンニク、ノ營利栽培行ハル。

第二章 養蚕業

一、養蚕

明治初年、前川製天長百景同トシテ飼育セシメ始メトシ、其後蘇平い、氏愛種ノ合謀ヲ受ケテ飼育シタル程度ナルモ、日露戦争後、養蚕業シテ茶をオオスモノ數氏ニ及ビ明治末ヨリ大正初年ニカケ、特ニ政州最盛當時、高橋十ルニ及ビ數系飼育スル者激増、正ニ養蚕全盛時代ト現出セレガ、昭和初年ヨリ飼育下落シテ、爲價低降ニ代ナル者ナ、決ハルニ至レシガ、其後養蚕業、行組合ノ設立ヲ見テ、紅木會、信會、長トナリ、現在共同飼育、養蚕共同販賣等統制アル活動オナエリ、アリ、現在組合長、徳島市長トナリ。

昭和十年現在、産出量ハ約六百袋、二千打百斤見當ナリ。

ニ、養蚕業ノ推移

年次	飼育戸數			産出量			價			年産	反別
	春	夏	秋	春	夏	秋	春	夏	秋		
明治四十年	九〇〇	四五〇	一五〇	八〇	八八七	三二〇	明治四十年	一〇	一	一〇	一
大正元年	一三〇	一三〇	一六	一	六一	八〇	大正元年	二五	二五	二五	二五
昭和元年	一〇	一〇	八	七	五二	二七	昭和元年	六	六	六	六

昭和元年	四五	五八	二六九	三九七	二二八四	二八六四	昭和元年	三三
五	六五	六六	三三一	四〇一	二一四〇	七六六	五	五
十	六四	七二	四五四	一五六	一七五〇	八六一	十	六

第三章 畜産

一、中

明治初年ヨリ現在ニ至ル養蚕ノ後、牛飼育ハ一戸平均頭數ニ於テハ大差ナク、乳牛飼育ハ明治中葉ヨリ赤松山以長、赤松山一戸、中川新五郎氏等ニヨリ始メラレ、大正初年ヨリ政州大戦當時ニカケ、全盛ナリ、特ニ中川新五郎氏ノ如キハ大正八年七月、阿高村酪農組合ヲ設立スル等、之ガ飼育奨励ニ執テ異常ノ努力ヲ精ハレシモノナリ。當時上垣ノ如キハ、養蚕家ノ五分ノ一位ハ乳牛飼養ニ居リシガ、戰後乳價下落ニ伴ヒ、急激ニ減少、現在ニ至リテモ飼育者少數ナリ。昭和十年、養田村ニ酪産煉乳トネツスル煉乳、兩社對立スルニ及ビ、乳價暴騰、將ニ乳牛飼養者、資金時代ト現出セシコトナリ。

昭和四年、水庄上組等、算ニ共同處理所ヲ設置シテ牛乳ノ處理、養蚕販賣ヲ行ハリ。昭和十年、現在、阿高村牛乳數十頭、生産乳量ニ百五十石、價額三千七百七十円ニ及ブ。

二、馬

明治中葉迄飼育ナシ、馬ハ北馬トシ、體態小ニシテコトク暴レルモノナリシガ、コノ頃ヨリ漸次

改良種移入ナレ、現在ニテハ改良種ノミト云ヒ得ル。

三 豚

豚ハ明治三十年頃上組河改換本兵次郎次ニ依リテ飼育ナレタリ初メ、四十一年頃金一信吉江本今平氏ニテリ大規模ノ飼育營マレ、一般ニ飼育者アリシモ明治末、病氣流行シ為ニ大正時代ハ不幸中絶ノ形トナリ居タリ。向ルニ近時豚肉需要ノ増加ト共ニ飼養増進ノ必要ニ迫ラル、モホク飼育者少数ナリ。

四 家畜飼育ノ推移

年度	牛	馬	豚	山羊	乳牛	乳量	牛乳價額
明治四十年	二二八	一二五	一〇		二五	三六	一〇八
大正元年	一	一	一		二五	三三	一〇五
〃 五	二二六	一一八	一		二五	三五〇	五七〇
〃 十	二一八	一〇一	一		三〇	二五〇	五七〇
昭和元年	三三九	九五	二		七	一六二	二七五四
〃 五	三〇七	一三一	一		八	一四四	二二三二
〃 十	三二〇	一〇五	一七		一〇	二五〇	三七七〇

五 養雞

明治初年迄ハ所謂ナンキン種大部分イシメ小型・地鶏ヲ飼育スル者モアリタリ。

コノ時代ハ卵ノ目的ニテ肉ハ食用ニ供ヒテ、産卵セザル様ニナリ又ハ孵化シテモ不潔種ノ類ヲ、森、葉ヲタレモナリ。明治中葉ヨリ漸ク雞肉ヲ食スル様ニナリ、明治既年ヨリ大正初期ニカケ、ミノルカ種・白色レゾホン種・名古屋コ、ナン種移入サレタリ。

昭和二年以水戸高野養會ノ奨励ト、昭和四年養雞組合、設立ト相俟テ多産種多産卵種ヲ、採用、共同出荷完全ニ行ハル、ニ及ビ農家、副業養鶏ハ甚カク進境ヲ示スニ到レリ。

昭和六年養雞園。本テ栗樹園ノニ並利用トシテ放飼養雞ガ正体的ニ經營サレ、大規模ニ人工育雛創始ナレキ程度ノ大規模養雞行ハレ昭和八年人工孵卵器ニ依ル養化ニ進境ヲ見ルニ至レリ。斯リテ漸次佐野養雞園・滝崎養雞園・銀山養雞場・藤手勝郎養雞場等續出シ特来テ鳴響ナレシモ、昭和九年九月、前古来官有ノ鶴岡被害ニ大キ、鶏舎倒壊ノ厄ニ遭ヒ、一時下火トナレシモ、再ビ其後ハ農家、副業トシテ益々隆盛ヲ見ルニ至レリ。

六 養鶏ノ推移

年度	飼養頭数	養鶏戸数	計	雄	雌	計	卵数	價額
明治四十年	一〇〇	六五	一七五	一	二	三	二四・五五〇	四九一円
大正元年	五〇	二五	七五	五〇	四〇〇	四五〇	四七九	一一九
〃 五	三四四	一一六	四六〇	一七六	一五七五	一七五〇	一七三三〇	三四六六
〃 十	三六五	七〇	四三五	一〇五	八九七	一〇〇〇	二〇五〇	六八一九
昭和元年	二〇一	三二九	五四四	一二五	二三一〇	三三五五	三三九・四五〇	一、八六二

七、養死

昭和五年	二三七	三一〇	四	五五一	一四〇	二六七〇	二八一〇	四六七五	一〇八〇三
十	二八〇	二八五	七	五七二	二八五	三四六五	三七五〇	七九一八	一六〇〇〇

昭和元年、銀山製茶は依り飼育開始ナレ漸次産盛ニ赴キ、昭和二年三月茶死組合ニ創立セラレ
 四國大改等トシ商人ノ間ニ生鬼ノ取引行ハレ、更ニ四國ヨリ培種講師ヲ招聘シコレヲ講習ヲモ
 行フニ至レリ、當時ノ飼養種ハ主トシテ、イタリヤ、メリケン等ノ白色種ニ限ラル。其後昭
 和八年麻花園ニ於テ茶死完全ニ建設シテ各種類大々飼育ナル飼養ヲ開始シ培種場ヲ計画セリ
 津名郡中川宗村養死組合等ト連絡シテ大改ノ精肉面トノ間ニ完肉ノ取引契約ヲ結び之ヲ事業ノ
 擴張ト獎勵シ努メタルモ、是亦昭和九年九月ノ颶風被害ニ依リ鬼舎ノ全壊トナリ、茲ニ水害業
 モ一時休止状態ニ置カル、ニ至レリ、當時ノ完種ハ白色種ノ外ニ毛用テンゴラ種ノ流行才来
 シ、一番ノ種鬼ニ三十四ヨリ五六十田ヲ稱シモ一時改良毛ノ利用價值ニ付キ疑問才生シ一時
 下火トナレル又再ビ之ヲ研究ノ結果種別改良他ノ完毛利用價值ノ再認識ト獎勵ニ依リ各地ノ
 飼養者夥シク増加ノ傾向ニナルモ、亦則該種ハ其後漸ク断テリ、當時更ニカスターレツキ
 其他ノレツキ種全國的ニ流行才極メ一番ノ種鬼三百田以テ稱シ、末又吉成、末広駒夫氏、
 藤化園等ニ飼養増殖ナレシモ、其數増加スルニ及ビテ種鬼トシテノ難路ノ域ヲ起スルニ及ビテ
 其先改良利用價值薄弱ナルヲ認メラレ漸次衰退セリ。
 昭和九年所謂非常時、波ニ来リテ森林有、獎勵ト陸軍省ノ優先買上ノ事能ト相俟テテ、ベルカ

アン・ナンナ種等至同ニ及トシテ其優秀性ヲ認メラレ此等ノ種鬼大イニ奨励ナレ、白色種鬼ハ
 主トシテ輸出皮トシテ用ヒラレ三原和農會ニ於テ之ヲ販賣納入ノ幹線ト統制ニカシ注ガ
 却テ各地ニ漸次飼養増加ノ傾向ニ在ルモ、本町ニ於テハ單ニ數名ニ過カズ増カスルニ至ラズ。
 八、養死
 昭和二十年、頃ヨリ當地福田養死開始ナレ、大正中葉迄相當盛ニ行ハレ、本町青年團ニ於テモ
 御大興記念事業トシテ昭和三年六月二十九日、一萬五千座ノ各支部ニ分配養死シレメタリ。

第四章 其他ノ副業

一、茶葉製造 約百年以前上地藤平振藏氏ニ依リ企業ナレシト始メトシ、明治二十六七年倉一信吉
 氏ヨリテ行ハレ、更ニ明治四十年以前田喜八氏ニ依リ企業ナレシニ何レモ二三ケ年ニシテ
 止ム。
 二、砂糖製造 昭和五年、上地前田吉成ニ依リ企業ナレシ地ノミナラズ、田地ニ過、甘蔗ノ栽培
 行ハレ、其後榎本峯吉、在田秀藏兩氏ニ依リテ行ハレ更ニ、明治末ヨリ大正初期ノ頃同頃佐
 渡惣太郎氏モ相當大々的ニ企業ナレシ進修農家ニテ相當手廣ク甘蔗栽培ナレタルコトアリ。
 三、製粉 明治三十年、頃ヨリ水車ニ依ル小支製粉、前田喜八氏ヨリテ行ハレ約十ヶ年ニシテ
 止ム。其後園生吉市、藤平熊平氏モ同様水車ニ依ル製粉ヲ行ハレシコトアリ。
 四、澱粉製造 明治三十年頃、上地倉一信吉氏ニ依リ西谷藩ヨリ澱粉製造行ハレシコトアリ。

五、煙草 明治三十年頃煙草事實調査確立ニ到ル迄ハ各戸ニ栽培サレ自家用程度ハ大半ノ農家ニ
 作付サレ。

六、棉 明治中葉迄當地一帯ノ烟作ニ盛ニ栽培サレシモ最近廢ル。即チ其廢ルノ途ト共ニ漸次桑
 園ニ更変サレ 現在作付ナシ。吹上方面ニ於テ其栽培特ニ多カリキ。當時家内工業トシテ衣分
 拂才實際リテ販リ綿打屋ニ出シテ打ナシヲ紡ギテ糸トリ更ニ之ヲ綿ト交換シ、斯ノ如クナ
 シ其中間商賣ヲ得テ着物ナド作ルコト適俗トナセリ。糸ノ粗キモ綿屋アリテ此災ニテ糸ノ手機
 ニテ年機オトスオ普通トナ。本町紺屋ハ未廣仲太上組、前川、土井、下組、藤手新川、川崎、
 塩屋等アリ。

七、藍 當地一帯、畑地ニ盛ニ栽培サレシモ最近廢ル。
 八、山出 明治十五年頃上組江本令平氏、前川喜藏氏共同ニテ河内藤手銀藏氏所有馬目林ヲ利用、
 大規模ニ飼育サレシコトアルモ不結果ニ決リテ中絶セリ。
 九、塔管 芝草ニヨル塔管ハ明治、末葉ヨリ 現在ニ及マルモノナラガ、大正七八年ノ好況時ニアリ
 テハ、女子子供ニテ一日一円乃至二月、實收トナリ婦女子ノ好副業トシテ頗ル旺盛ナリシ
 一、最近時之機械化ト使用或速ニ依リ漸次衰退ス。
 十、農産品統計 (塔管)

年	度	戸数	枚数	量	價	額
大正四年		四九七	六八八	一〇、二五、五〇〇	一、六七、三〇〇	

年	度	戸数	枚数	量	價	額
大正五年		五四一	七九九	一〇、八八、五〇〇	一、五五、二六	
〃	六年	五五六	八三三	一〇、七、八五〇	一、五七、一七	
〃	七年	六八六	八二六	一〇、七、八〇〇	一、四、五〇〇	
〃	八年	四四二	六九〇	六、二〇〇、〇〇〇	一、六、五〇〇	
〃	九年	五三一	六三五	六、五〇〇、〇〇〇	四、九、二〇〇	
〃	十年	五〇六	四九五	一〇、三、六七、二二〇	五、二、四、一三	
〃	十一年	六、二	七、三六	一〇、二、六、四、一五	四、一、〇、二八	
〃	十二年	二、二八	二、六五		六、七、〇	
〃	十三年	一、五〇	一、六五		三、五〇〇	
〃	十四年	一、二〇	一、四六		二、八五〇	
〃	十五年	一、一五	一、三八		二、七八〇	
〃	十六年	一、二〇	一、四四		二、四五〇	

一、木炭 明治四十年頃下組藤原某河波ヨリ黒燒製炭法ヲ取入レシニ始マリ、上組松本篤次郎氏
 之ニ次ギ、四十二年頃上組末廣文七氏之ヲ始メ漸次河内新蒸ニ移盛トナリ其後末廣久博氏、
 東組中、四、鴨路ニ傳フ。現在本町産額十七八才數ヲ、其後昭和九年園生高藏氏河波ヨリ日
 燒製炭法ヲ取リ入ル。現在産額相当多量ニシテ所収ノ自給ヲ充テテ餘ホ餘リアリ。實業、福
 良方面ニ相當移出ノ状況ニ在リ。山村産業トシテ重要ナル地位ヲ占メ居レリ。

木炭、産額（累年イケダ茂）

昭和元年	一、一三〇、〇	四〇三、四
二	一、八〇〇、〇	六三〇、〇
三	五、五〇〇、〇	一、三三〇、〇
四	七、五〇〇、〇	一、二〇〇、〇

一、推挙 昭和十一年より組藤花園を於て設作中ナリ。
 二、栽培 古来富地方、山林に叢生してを盗採ト糾弾、局、收量増大セカ、指して昭和八年木町農会
 三、之が栽培増殖ノ計劃ヲ樹立シ盗採ヲ禁止、増産、奨励ヲ行ヒテ以来逐年増加ノ傾向ヲ示
 リ指芽出荷組合を設立セル。昭和八年度以降、出荷状況左ノ如シ

昭和八年	四九一、〇〇、〇	一、三九〇、四九三
九	一、〇三七、四三五	一、二八八、二二〇
十	四七四、六四〇、〇	五、六六、三九

将来ノ計劃 将来十一年計劃ニテ、毎年全産額内也、賣上金取得ヲ以テ目的トス。
 三、蜜蜂 明治、木沢一時和種蜜蜂ノ飼育探索ヲ行フ者、堀水市市民外数名アリタルモ廢レ、現在採
 蜜量多キ洋酒ノ輸入ナル、アリテ以来藤花園其他ニ増殖ノ計劃アリ、糖價ノ昂騰ト相俟テテ
 農家ノ利益經濟ノ方面ヨリ多少ノ進展アルモノト期待ナル。

戸数 産量 蜜量 價格 單價

昭和二年	六	一〇	四、	八、四	一、九〇
三	二	一〇	四	八	一、九〇
四	一	四	三	九	三、〇〇
五	二	四	二	四	一、八〇

一四、乳用山羊 當所ニ於テル本種飼育ハ最近ノコトニ屬シ極度限水品一氏、飼育ヲ始メトシ、現ニ

院、藤花園、銀山大正園、楠木三郎氏ニ於テ、飼育ナル。

一五、養蠶 最近ノ流行ニシテ現在未養蠶夫以テ依リ試育中ナリ

一六、茶 明治以前ヨリ大正十七年ハ自家用トシテ茶畑ヲ耕作シ、或ハ田畑ノ岸畦等ニ植栽シテ蓄

茶トシテ用ナルコトナリシモノモ、茶産量ノ急興ト共ニ茶畑ハ漸次荒廢ニ變更ナリ、現存産量

明治四十年	一、	八、〇	三、三〇	一、四〇
大正元年	三	九、	三、六〇	一、四〇
二	三	八、五	四、三〇	一、五〇
三	三	四、五	七、二〇	一、六〇
昭和元年	三	六、五	九、一〇	一、四〇

一七、畜 植家畜ニ明治初年以來種数狀既極盛トシテ畜養ノ盛ナリ、コレ等ニ由テニ促成栽培ノ實
 行ニテ對養ノ増加ノ計ルニナリ、真竹ニ對シテハ大正末迄相當増産ヨリ生カサル養アリタ

レ共、最近給付物に使用スル器具器物等多クハ金物に使用スルコト、ナリテ以て未だ價格若
 下落セリ、之ヲ利用ノ途ヲ考究スルニ要ナリ。

昭和元年 一三五、六八、四五〇、
 五〇 三五五、一三四、三五
 十〇 四五〇、一〇二、二五

第三章 土地、農業、関係ル統計

一、自作田地及二、自作以上田地、及別

年度	自作田地	自作以上田地	計
昭和元年	五一、二八	二六八、八八	三二〇、一六
五〇	五一、五	二六九、一	三二〇、六
十〇	三〇、〇	二九三、一	三二三、一

六、自作田地及自作畑畑、各及別

年度	自作畑	自作	別	計
昭和元年	二一、五	一一三、五	三二六、〇	三九一、〇
五〇	一九、九	一一三、九	三二六、八	三九〇、六
十〇	一九、七	一一三、四	三二八、一	三九一、三

三、自作小作及自作兼小作各農家戸數

年度	自作農家	自作兼小作農	計
昭和元年	二〇、四	一三一	一六一
五〇	三〇、二	一六四	一九四
十〇	三一、三	一〇三	一七〇

四、耕地所有、廣狭ニ依リ區別シタル農家戸數

年度	五反未満	五反以上	一町以上	二町以上	三町以上	五町以上	計
昭和元年	三六四	二二八	五九	四	四	五	五六三
五〇	三二二	一一一	六〇	九	四	一	五一六
十〇	三三四	一一九	六一	一	八	四	五二六

五、耕作スル耕地、廣狭ニ依ル農家戸數

年度	五反未満	五反以上	一町以上	計
昭和元年	二二八	二二一	四四	四九三
五〇	二六三	二五六	五九	五七八
十〇	二六三	二六二	六一	五八六

六、總戸數及専業並兼業各農家戸數

年度	總戸數	専業農家	兼業農家	計
昭和元年	五六三	三三四	一五九	四九三

七、耕地面積各年米價別

昭和五年	九〇八	三八四	一九四	五七八
昭和六年	九二八	三八九	一九七	五八六

八、土地賣買價格ノ推移

昭和元年	昭和三五年	昭和十年
田 三二六〇	三二七、二	三二八、三
畑 三九六〇	三五三、〇	三五五、〇
計 七二二〇	六八〇、二	六八三、三

第六章 農會

年度	田			畑			地		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下
大正二年	一、〇〇〇	六五〇	二五〇	五〇〇	三五〇	一〇〇	一、〇〇〇	五〇〇	一五〇
〃 〃 〃	一、〇〇〇	六〇〇	二〇〇	四〇〇	三〇〇	八〇	一、〇〇〇	四五〇	一三〇
〃 〃 〃	一、〇〇〇	八五〇	四二〇	五三〇	四四〇	一七〇	一、〇〇〇	七三〇	五〇〇
〃 〃 〃	一、〇〇〇	八〇〇	四〇〇	四五〇	三〇〇	一五〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
昭和十一年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	四五〇	一、〇〇〇	四〇〇	一五〇	一、〇〇〇	六〇〇	一、〇〇〇

改正認可年月 明治三十四年四月十一日

設立經過 明治三十四年時、村長櫻木兵次郎氏其前、奨励ノ下ニ村農會ノ設立ヲナスベク各部落ヨリ一名ノ設立委員ヲ選ビシ、委員ハ當該部落ヲ代表シ農會設立ノ賛同ヲ求メ入會申上書ヲ取纏メ茲ニ明治三十三年勅令第三十号農會令ニ依リ設立ヲナスニ至リタリ。

設立委員 森川木藏 島本由吉 奥野多雄太 阿部信平 櫻本文太郎 木本高次郎

部落名		人員		別	
上組	一一三	六五四	五〇八	西組	四五
下組	六五	三八一	七〇三	東組	六〇
次上	六〇	四八三	九一二	塩産	七二

歴代役員及總代

1. 明治三十四年初代役員
- 會長 櫻木兵次郎 副會長 島本由吉 幹事 濱本文太郎、森川木藏
 - 郡農會議員 嶋本町吉 豫備議員 森川木藏
 - 評議員 森川木藏、松木仁吉、阿部信平 島本由吉 濱本文太郎、櫻木高次郎、櫻木高次郎
 - 櫻木高次郎、谷口忠次郎、南熊三郎 藤本高次郎 土井文吉 川崎敬吉 阿部忠代藏
2. 明治三十六年四月改選
- 會長 藤原永一郎 副會長 藤平秀太郎 幹事 濱本文太郎、森川木藏
 - 評議員 嶋本町吉 櫻木由吉 豫備議員 櫻木兵次郎 評議員 重任

3. 明治三十八年四月改選

會長 藤平考太郎 副會長 江本藤治 幹事 重任 評議員 重任

評議員 江本藤治 藤平考太郎

4. 明治四十年四月二日改選

會長 柳 孫助 副會長 江本藤治 幹事 重任 評議員 重任

評議員 柳 孫助 藤備議員 江本藤治

5. 明治四十三年三月二十五日改選

會長 柳 孫助 副會長 何部信平 幹事 擇田隆水郎 江本金作

評議員 櫻本兵次郎 櫻本峯吉 銀山惣吉 南燕三郎 何部信平 谷口忠次郎 倉本伊平

櫻本文太郎 櫻本熊藏 擇田長策 金藤世美 谷口守次郎 若原生八 長池茂三郎

大正七年三月二十六日改選

會長 柳 孫助 副會長 村居佐平 幹事 重任

評議員 櫻本峯吉 赤藤正義 擇田長策 銀山惣吉 團生利吉 長池茂三郎 南燕三郎

川崎敏平 何部千賀藏 何部長代藏 水本隆次郎 櫻本文太郎 倉本伊平 島本由吉

大正九年三月廿五日改選

會長 柳 孫助 副會長 銀山惣吉

評議員 柳 孫助 藤備議員 銀山惣吉 幹事 櫻本繁市 擇田長策

評議員 赤藤正義 團生利吉 倉本伊平 島本由吉 櫻本文太郎 村居佐平 仲野平

南燕三郎 何部千賀藏 何部長代藏

大正十一年二月廿二日 會長以下全役員辭任二付改選

會長 櫻田長策 副會長 櫻本茂一

評議員 櫻本昌八 野村長平 若原武市 何部三右工門 太田忠太郎 藤本茂次

擇田隆水郎 赤藤正義 森川八郎 杉本庄太郎 本條團八 岡本治一 若原生八

大正十二年三月十五日總改選

會長 櫻本繁市 土井文吉 太田忠太郎 櫻本茂一 山本利市 藤上為平

評議員 藤本佐平 本庄團八 櫻本茂一 何部三右工門 谷口重五郎 南燕三郎 五岡一

平野善七 大西文次 何部因平 何萬岩太郎 櫻本長太郎 藤本茂一 何部千賀藏

團生利吉 垣藤鶴平 村上佐市 何部千賀藏 櫻本竹市 宮口伊助 小原政和

大正十二年三月廿一日改選

會長 銀山惣吉 副會長 櫻本茂一

評議員 土井文吉 岡水治一 岡水高市 森本常平 阿部三右工門 櫻本繁市 村居佐平
垣取鶴平 宮本芳太郎

評議會職員 岡水治一 豫備職員 櫻本繁一
昭和二年四月一日総選挙

総代 杉本孫平 川原徳郎 木本隆雄 濱本篤一 池本常太郎 小原佐和子 赤穂篤吉
高山四吉 藤平九平 宮本孫太郎 田中和平 仲野貞一 初田岡市 櫻本高平
森本定二郎 藤本佐一 中川勝太 太田忠太郎 團生利吉 土井守市 藤本徳次
阿部幸次郎 若原武市 丸山梅市 櫻本篤一 阿部三右工門 木本七藏 阿部清一郎
阿部慶市 岡水高市

昭和二年四月十六日改選

會長 銀山惣吉 副會長 岡水治一
評議員 大西文次 土井文吉 若原孫生八 藤本常平 森本常平 阿部傳作 櫻本繁一
池本惣吉 垣取鶴平
評議會職員 岡水治一 豫備職員 櫻本繁一
會長 銀山惣吉 副會長 岡水治一
評議會職員 岡水治一 豫備職員 櫻本繁一
昭和六年四月一日改選

評議員 櫻田長策 池水孫平 平野善七 若原武市 川原源平 阿部幸次郎 山口兵次郎
藤本佐平 江本文五郎 河部龜中 濱本篤市 村居伊平

櫻田 櫻本高平 杉本孫平 木本隆雄 濱本篤市 藤本佐一 阿部龜中 山口兵次郎 井上和乎
櫻田長策 川原源平 前田房吉 宮口秀一 大田又一 坂部忠平 櫻本常平 阿部幸次郎 森本常平
中山徳藏 谷口守平 鈴木儀市 高見祐一 濱本篤市 阿部伊平 水本五三郎 坂本五市
阿部丑藏 阿部重平 江本文五郎 濱田平一郎 谷口政太郎

昭和十年四月一日改選

會長 岡水治一 副會長 杉本孫平
評議會職員 櫻田長策 豫備職員 杉本孫平

物代 佐渡 清庄田一男 大西市夫 狭間玉市 櫻本貞夫 山本寅夫 山崎官吉 山下岡市
河部丑藏 森本常平 小田勝平 山岡龜三郎 村居礼七 谷川茂市 櫻本利一 山形勇吉

職員

囑託技術員 藤平寛平 大正四年度
主任技術員 宮本芳太郎 自大正五年四月一日
至一五・三・三一
兵庫縣農林技 官本芳太郎 自大正一五・四・一
至

技師兼書記

宮本芳太郎

自大正五年四月一日

幹事

宮本芳太郎

自一五・三・一

囑託書記

藤井慶郎

自昭和四年四月一日

小原 賢

自五・三・三

岡本 潤次

自九・四・三

自九・九・三

二、主たる業績

麥作

一、大正三年度ヨリ村内各部若手農家ヨリ十名以上選拔、徳島縣下ノ（埼玉縣）田式改良委員任命、改良委員視察ニ派遣。

一、大正五年在東式ト權田式ト、折中、高畠式改良委員任命、現在ニ及ブ。

一、大正五年以來、麥作多收獲局評會、麥作立名品評會、麥奴稼防及口壺水選ヲ行フ。

米作

一、麥作ト同時ニ稲作多收獲獎勵

一、大正三年度第一回稲作多收獲獎勵會、収種極水選、改良苗代獎勵

一、稲苗法改良、正條植ハ昭和三十三年ヨリ三十七、八年ニ至ル間ニ普及シ終ル。

昭和廿八年六月、川辺和ノ需ニ應ジ本村甲乙七十回在正條植教師トシテ派遣、實地指導

昭和三十九年六月、守栗和ノ需ニ應ジ十八名同上

一、苗代品評會ト場原並ニ薄海普及促進

一、大正五年深耕ノ獎勵

一、大正五年以來、交採種團ノ設置

一、種子貯藏庫ノ建設（各部落農會附設）

一、動力ニ依ル共同作業ノ獎勵、大正十一年度以降、各部落農會附設

一、部落農會ノ表彰

養蚕

一、明治四十二年獎勵ヲ加フ。

一、大正元年始メテ教師ヲ聘シ、稚蚕共同飼育ヲナシ、毎年續行ス

部落農會ノ設置

一、大正六年ヨリ大正八年十月ニ至ル間ニ大部落七、小部落四計十一ヶ部落農會設置完了ス

一、各部落米麦共同採取團ノ設置

一、大正十年度ヨリ共同苗代實施、苗代品評會出席

一、選種及麦奴防除

一、米麦ノ共同販賣、葱頭ノ共同出荷、雞卵共同販賣、果樹、山林ノ改良等ノ種苗購入并販

一、農事振興會設置獎勵

一、各種品評會、開催ト獎勵金、交付
一、農談會、開催

正徳栽培獎勵

大正十一年麦作不況、緩和策トシテ、正徳栽培、獎勵ニ着手、今年五月各部落ヨリ指導隊選拔シ、泉州ヨリ實地指導者ニ名ヲ聘シ、講話並ニ實地指導ヲ受ケレタル結果、三町歩、栽培面積ヲ見タレ共、以當收量千石ノ出ヅバ、實收値五錢乃至六錢ナリト爲中止者多カリシガ、塩産和落ノ中心ニ本庄和落、一部ニ依然繼續ナル、アリテ大正十四年頃ヨリ木打産亦高、品質優良ナルノ故市場ニ認めラレ栽培技術ノ向上ト共ニ及當千四百五百貫ノ收量ヲ得ルニ至リ、大正元年、二年ニハ麦作ノ約三倍以上ノ收量トナルニ及ビ着レテ増加ヲ来シ、昭和二年、作付ハ一躍十八町歩トナル。昭和四年度泉州三割減ノ影響ヲ受ケテ價格暴騰一反步二百五十町内外ノ收量トナリ、米作ノ二倍乃至三倍ニ相當ス。當年作付反別七十五町歩、昭和三年度ヨリ高島村正徳出荷組合ヲ設置シ、販賣ノ統制ヲ計ル。現在ノ收量反當千八百貫内外ヲ得ルモ、勢ウラス。

一、銀事業

一、各種講習講話會、開催

一、病虫害防除ノ施設、螟虫及蠅虫被害甚覺上、野積草、取入、麦収防除、有害鳥獸ノ買上ゲ(雀一羽一錢、烏十錢、もぐら二十錢、野犬五十錢、猪二四、天牛一錢、雀鳥、大正十三年限買上止)

一、大正五年以來深耕獎勵

一、自給肥料獎勵、大正五年以來米粟當糞綠肥獎勵、昔州大豆、堆肥、堆肥倉建設補助金交付
一、各種印刷物、配布 (一、株五町以外)

一、品評會、試作田、共同苗代設置獎勵補助

一、動力機ニ依ル共同作業ノ獎勵

一、農事獎勵協議會

一、種苗、農具、農用藥品購入輸送

一、農産物共同販賣

一、養蚕獎勵、傳習所設置、巡回教師設置、桑園増殖、種蚕共同飼育所設置、各種購入
一、商販賣ノ幹設

一、畜産ノ獎勵、大正十二年搾乳共同販賣並ニ之ガ必要器具購入補助

昭和四年乳牛共同搾乳所建設ニ補助。大正十三年種乳牛設置補助。

昭和二年ヨリ毎年種馬購入ニ補助

一、養鶏獎勵、昭和二年ヨリ毎年継続、養鶏組合設置以後補助

一、養蠶獎勵、昭和三年以降養蠶組合ニ補助

一、揚子場、設置、大正七年養蠶所、要所ニ設置

一、農事雜誌、配布

一、初九年賀登發止宣傳 大正十一年度以降
三、各部茶農會

○東垣部茶農會

一、創設 大正五年四月 一、現在會員數 八十名
一、歷代部茶農會長 榎勢重吉、榎本重一、藤本佐平、赤野吉市
一、昭和十一年五月 河島町農會主催、自給肥料共進會ニ一等賞
一、同年同月本所主催小麦増進競進會ニ於テ第一等賞
八、昭和十一年七月ヨリ自家用醬油共同醸造經營ヲ行フ。

○上垣部茶農會

一、創設 大正七年七月一日 一、現在會員數 壹百名
一、歷代部茶農會長 宮本芳太郎、榎本高平、大西久一、榎本保雄、佐渡清
一、昭和三年九月勸力部新設。種子貯藏庫建設
一、九年八月 玉葱共同處理所建設。河津農友會ト合併シ、上垣部茶農會ト改稱ス。
八、 部茶農會事業増加ニ伴ヒ、部制ヲ布ク（玉葱共販部、米共販部、米支
保種部、肥料共購部、養蠶部、勸力部）
二、大正十二年六月 兵庫縣農會主催、新米支作改良共進會ニ出品、優秀ニテ表彰セル。
○塩屋部茶農會

一、創設年月 大正六年十月十六日 一、現在會員數 六十五名

一、歷代部茶農會長 田岡勝郎、村上佐市、岩澤勘市、山崎官吉、廻角伊平

一、特殊施設經營 大正十五年四月 勸力部新設

二、大正十五年一月 精穀新施設、農事共同作業組合施設

八、 昭和三三年 勸農會、ノ表彰セル。

玉葱共同販賣部設置

○下垣部茶農會

一、創設年月 大正七年 一、現在會員數 卅十五名

一、歷代部茶農會長 土井文吉、本條國八、川原富郎、井上和平、藤原健一郎、前川友平

一、昭和六年 縣農會ヨリ共同事業施設優秀部表彰トシテ表彰セル。

○北垣部茶農會

一、創設年月 大正八年四月 一、現在會員數 二十四名

一、歷代部茶農會長 村居佐平、池本永吉、池本惣吉、村居伊平

○西垣部茶農會

一、創設年月 大正八年十月廿七日 一、現在會員數 九十名

一、歷代部茶農會長 榎本繁一、木田忠太郎、榎本繁一、山岡龜三郎

一、八木美、玉葱、錫卵、共同販賣

昭和五年三月廿三日 産物倉庫是故

○中西部落農會

- 一、創始年月 大正十二年四月
- 一、現在會員數 二十五名
- 一、歷代部落農會長 森本常平 中川勝太 濱本高市 畠田寅市 村上常吉

○佐野部落農會

- 一、創始年月 大正五年五月五日
- 一、現在會員數 六十六名
- 一、歷代部落農會長 岡水高一 平野善七 岡水高一 仲野貞一 山本寅夫 櫻木貞夫
- 一、創設當時岡水高市氏德島縣名西種へ支作改良、首先芽根移植、實地改良指導
- 一、大正八年農友會設置ト共ニ選種、病虫害防除、種子選水選、苗木品評會 深井實助
- 一、大正十四年苗木品評會（坪蒔大会以下）或日苗木獎勵、水稲多次獲品評會（坪蒔審査）
- 一、大正十二年十月村農會 福地ニヨリ播種研習園村道分都茶園茶肥料試視察
- 一、大正十四年 品種改良、天奴除防、冷水選水選法、藤肥青川大重普及交百弄同購入、
- 一、昭和三年井岡作業所建設精米機、豆粉粉機、支協設設置
- 一、昭和四年 動力農具 節設置、採種園設置
- 一、六年 井岡弄同出荷開始
- 一、七年 支作、小支保並毛品評會、玉葱多收獲品評會、玉葱多收獲品評會
- 一、八年 佐野、水産佐野合同、上佐野部落農會設置

○以上部落農會

昭和十年 縣農會獎勵ニ基リ町主催小支改善出落單位品評會ニ一筆入賞
 一、創始年月 大正九年一月十日 一、現在會員數 不詳
 一、歷代部落農會長 阿部三右工門 阿部傳作 阿部俊市
 一、阿部農會玉葱出荷組合

沿革大要 昭和三年三月玉葱出荷組合組織シ昭和三年度ヨリ採種補助、村農會補助、賣上
 奨励金等々活動資金トシテ飛躍スルニ至ル。昭和三年度出荷成績左ノ如シ
 五月十六日青切出荷開始トシ九月九日終了

部落	出荷回数	出荷依數(16)	出荷實數	賣上金高	作付反別	作付人員
新 落	二二	七四三七	一一一五五五	七八一七九七	九〇〇以	五〇
堀 屋	一一	七六四〇	二四六〇	八八八六五	本庄佐野七〇 堀屋二〇	四五
佐 野	一一	七六一九	二二七八五	一五二七三六	一八五	三三
下 組	九	一五一九	二二七八五	一五二七三六	一八五	三三
西 組	一三	六五五	九八二五	六五一五五	一〇三	一〇
上 組	九	一九四六	二九一九〇	一九三三四六	二三〇	二八
改 上	三	三九〇	五八五〇	三八九八〇	八〇	一五
中 西	三	一〇九	三三三五	二〇八九〇	三六	六
東 但	六	七七一	一一五六五	六九九二〇	八七	一〇

昭和五年度産出量作付
 計 一三・七二〇 二〇・五九〇 六一四・一四七・二五 一七・三三六 一六四
 九 田 二 三六 五四〇 四〇・三六 二五 四
 新 産 作付人員 作付人員

新 産	作付人員	新 産	作付人員
河 津	一七八	吹 上	六二六
本庄佐野	一六七	塩屋佐野	二二八
中 西	一六五	下 組	四六二
上 組	六四九	丸 田	一六
塩 屋	一五四八	東 組	四〇四
西 組	四五七	計	四九〇
	五五		四〇三

第七章 阿萬村養鶏組合

沿革 軍式農業ヨリ被大農業ノ高唱ニ伴ヒ全国ヲ舉テ養鶏熱旺盛トラントスル時、大正十四年四月十一日農會、郡養鶏會長會ニ於テ之ガ奨励アリテ昭和二年度上組、東組兩部第二組合ノ設置アリ。昭和四年下組設立ト同時ニ村一八九ノ組合設立スル。昭和八年度解散。養鶏組合規約（略）

第八章 阿萬村養蚕組合

愛媛物トシラ時ニ盛衰流行ヲ繰返シタル養蚕業ハ大正十五年ノ春ヨリ全国的ニ卸部ノ別ナク生業ニ機械的ニ移行ヲ極メタル小島熱ノ後ヲ享ケテ養蚕熱高マル。時ノ農會長録山惣吉氏之ガ奨励ヲナスベク大正十五年十月別本所ヨリ種免購入飼養セリ。昭和二年三月廿五日阿萬村養蚕組合組織、毎年縣費補助金ヲ得タリ。（組合規約略）

第九章 有限責任阿萬信用販賣購買組合

一 沿革 本組合設立ハ大正四年三月ニシテ有限責任佐野信用購買組合ト稱セリ。當時組合員四十六名、組合長赤松正義氏野金ノ奨励、肥料其他購買品ヲ組合員ニ賣却スル等、其事業ニ盡瘁セル為、漸次好況ヲ呈セリ。大正十二年四月、組合名稱ヲ有限責任阿萬信用購買販賣利用組合ト改メ阿萬村一田ノ區域トス。組合員數百九名ニシテ貯金約四万円、當時淡商會社ノ破産ニ依リテ其影響ヲ受ケタリ。時、理事録山惣吉、宮本芳太郎兩氏大ニ盡瘁之ガ秋損ノ整理ヲナシ以テ今日アラシムルノ因ヨトセリ。

大正十四年組合長録山惣吉氏就任、組合ノ整理ヲナス一方材料未加入者ノ加入勸誘ニ盡カサル。大正十五年組合代表變更、山本利市氏就任。昭和二年理事録山惣吉氏組合員ノ増加ヲ画サレシ結果加入者約五百名ニ近クナルニ至レリ。昭和三年一月役員改選、組合長岡本浩一氏就任現在ニ至ル。昭和四年末ニ於ケル組合員六百名、出資口數八百口、貯金十七萬圓ヲ把握シ所内徳會ノ金融機關タルニ到ル。

第十章 工業

二 製陶業

阿高町製陶業ノ起源

天保年間聖武天皇ノ御宇信行奉、諸國ヲ巡リ、家ヲ勸化シ、道路ヲ開キ、橋ヲ架ケ、巷ヲ築キ、又陶器ノ業ヲ勸メ等シテ世ヲ益スルコト多シ、此地ニモ來リテ本庄河内ノ山麓ニ竈ヲ築キ、陶器ヲ焼ケリト傳ヘラル。今ニ河内山林工中又ハ畑地ヨリ山ノ如キ素焼ノ破片出ヅルハ之ヲリトイフ。

明治以後ノ製陶業

明治廿五六年頃、野島藏氏、前上組公會堂敷地邊ニ製陶ヲ始メ、後大師山江本力太郎先生、鎮原祥進、敷地ニテ大規模ニ經營ナル。當時ノ焼物ハ皆、既平焼ニ劣ラザル優秀ナルモノナリトイフ。

2. 明治三十三年一月中西松原ニ法陶株式會社分工場設置營業ナレシモ、砂ノ飛散ニ依ル機械齟齬ト陶工混入搬出不便、為明治四十四年二月廢止ナル。

3. 明治三十七八年ノ頃清水虎平、庄田秀藏、松本幸一、倉一茂代一諸氏本庄司ニ製陶ヲ始ム。

4. 明治三十九年八月前者ヲ引継ガエ井長五郎、藤平彦太郎、榎本兵次郎、江本藤治、島本由吉諸氏ニヨリ田村久平氏ヲ支配人トシテ、資本金八萬圓ノ日陶株式會社トナリテ現ハレ、十數年間大規模ニ經營ナレタリ

5. 日陶社ノ中絶ヲ享ケテ江本藤治、蟬塚虎二郎両氏、恨同ニテ暫時之ニ從事ナレタリ、蟬塚製陶所ト稱ス。

6. 其後ヲ享ケテ大正八年、同一個所ニテ井又吉、倉本伊平氏等暫時經營ナル(南法製陶社)ノ現在ハ下組蟬塚氏個人經營ニテ事業ヲ繼續セルアルノミナリ。

二製瓦業

起源及發達ノ経路

天保弘化ノ頃通稱「登籠」津井村ヨリ米ヲテ束組平松ノ尾崎ニ於テ製瓦業ヲ創始ス。明治ノ初年迄ニ束組ニ軒元田ニ軒討同軒トナリタルモ何レモ皆津井村ヨリ來レル人ナリ。明治十年頃ニハ、東組三、丸田三、西組二ノ八軒トナレリ。當初瓦ノ値段ハ一石ノ値ニ相當シ、三田産炭ナリトイフ。明治二十五年ニハ十回軒、明治三十年ニハ二十四軒、大正元年七九、昭和元年一、二〇、昭和十二年現在一六三軒ニ増加セリ。

昭和十年度ノ如クハ一千四百萬枚、價格五十萬圓ノ生産額ニ達スルニ至レリ。

生産概表

年次	瓦數	製産數量	平均値	製産金額
明治初年	四	一五萬枚	不詳	不詳
〃 三十五年	一四	七五	八圓	六十萬圓
大正元年	七九	五〇〇	一ニ	六〇
昭和元年	一ニ〇	一〇四〇	二五	三六四
〃 十年	一六〇	一四〇〇	一五	五〇〇

販路並ニ販賣狀況

當初ハ村以方面ノ需要ヲ充スノミナリシモ、製産ノ増加ト共ニ明治二十年頃ヨリ束組中山嶺

四郎氏河及徳島方面ニ販路ヲ開拓ス。後三四年ニシテ大阪方面へ移出ヲ初メ、三十五年頃ヨリ紀州方面ニ販路開ク。現在ニテハ其製呂ノ大部分ハ大阪京都和歌山・紀州熊野方面ニ販賣ナル。而シテ河高製瓦一手組ニテ十艘ノ船ヲ動シ積送シ、共同支所ノ製呂ハ買積船頭六七名ニ依リ七八艘ノ船ヲ浮ベテ之ガ搬出ニ當レリ。

製瓦組合ノ沿革、組合員

人明治二十六年中山清次郎氏ヲ組合長トスル當時ノ同業者十四名ヨリナル申合組合「社」ナルモノヲ作り製呂ノ統制販賣ノ行ヒ、東組ニ其事務所ヲ置ケルヲ端矢トス。
 明治三十一年一月、橋本保三、與津虎藏、中山清次郎氏、首唱ニ依リ河高村及製造業組合、設立申請ヲナシ、同年九月二十四日認可ナレ中山清次郎氏組合長ニ就任ス。當時ノ組合員二十六名ナリ。明治三十五年一月中山氏、後ヲ受ケ村居佐平氏組合長トナル。副組合長楠木勇吉氏就任ス。當時ノ組合ノ製呂販賣方法ハ當村ニテ仲介商人ニ販賣スルモノナリシガ故ニ往々ニシテ仲介商人ニ依リテ損害ヲ被ルコトナリ。燃料石炭ノ如キモ明治末ヨリ移入ヲ始メシモ仲介商人ニ利セラル、コト多クテ石炭購買ヲ計劃シ併テ瓦ノ共同販賣ヲモ目論ミ、大正七年資金三万円ヲ募リ、河高一手組ト稱スルト共ニ、大阪ニ販賣所ヲ設置ス。當時ノ組合員一〇九名ナリ。副長トシテ工井傳吉氏就任。大正十四年一月楠木勇吉氏ニ更ル。
 昭和三年二月現在ノ組合事務所ヲ新築移轉ス。昭和九年十一月ヨリ一手組ニ浜路工業組合河高一手支所ヲ併置シ河高一手支所トモ稱ス。

昭和十年六月組長村居佐平氏死亡、村居氏ノ代理組長トナリ現在ニ及ブ。
 現在組合員數九十九名
 幹部 代理組長 村居佐平 副組長 楠木勇吉 書記 吉澤太郎 支那人 橋本和子
 大正出稼所長 吉澤太郎

河高製瓦組合 (浜路及工業組合共同支所)
 明治四十五年頃一手組ヨリ合體製瓦共同組合組織現在ニ及ブ。昭和九年十二月當組合ニニ浜路工業組合河高村居支所ヲ併置ス。當時ノ支所長ハ共同組合理事若井甚太郎氏、副長ハ金木水七藏氏ナリ。現在支所長 谷川作吉氏、副長 北崎小吉氏。現在組合員七十名ナリ。

3. 明治四十年頃水匠上組才、製瓦根本家吉田伊平、村上貞吉氏等ノ組合ニテ製瓦業ヲ經營シレシコトナルヲ聞モナリ中絶セリ

三 工業統計

年次	製造戸數	價格	数量	價格	仁賣ニ付	製造戸數	價格
大正四年	六四	二一					
十年	九七	五六					
昭和元年	一三〇	一二六	四二〇〇	六六六五	一一五	一	一十円
二年	一三九	一四六	四一〇〇	七三八〇	一八〇	二	七七

欠

昭和三 四年	昭和三 五年	昭和三 六年	昭和三 七年	昭和三 八年	昭和三 九年	大正四 年	昭和二 年	昭和 三年	昭和 四年	昭和 五年	昭和 六年	昭和 七年	昭和 八年	昭和 九年
一三七	一三〇	一二八	一三四	一四三	一五八	九	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
二二三	一九二	一五九	一二九	一二二	三〇四	九	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一
五三八	五三九	五九八	五九〇	六七五	六九〇	二	六	六	六	六	六	六	六	六
一〇、二三七	一〇、二四三	一〇、七九六	一〇、六二九	一六、八七五	二〇、七〇〇	四七	一、三〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇
一九〇	一九〇	一八〇	一八〇	二五〇	三〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九・八	九・五	八・三	四・一	三・五	三・八									

欠

昭和三十七年

三	一、四三〇	三	四	一、八八五	六五
八	一、五七五	二	六	二、〇二五	七五
九	一、六七五	二	五	一、九六〇	七〇

昭和三十八年

四	一、五七五	二	六	二、〇二五	七五
四	一、六七五	二	五	一、九六〇	七〇

昭和三十九年

四	一、六七五	二	五	一、九六〇	七〇
---	-------	---	---	-------	----

高刀貝採取の起源

本町水産物中其産額最多クハ高刀貝ニシテ、コレガ本町ニ採取セル、ニ至リシハ明治五六
 年ノ頃盛前ノ人福本福松氏、漁民ヲ連レテ水地ニ来リ次ニ沖ニテ高刀貝採取ヲ始メニ三年ニ
 シテ歸リシガ、爾後漸次採取スル者増加シ、ソノ方法ニ於テハ大レル進展ナキモ加工ニテ獲
 取トシヌハ干物トスル等、産額、利用夫ニ最重要水産物ナリ。

水産統計

年次	水産業者	業主	被用者	計	動力トシテノ	養蠶機密船	計
大正元年					五七		五七
五年					五七		五七
十四年					四九		四九
昭和元年					四九	〇	四九
三年					五九	三	五九

昭和五年	七年	九年	十年	年次	昭和八年	十年	十四年	昭和元年	三年	五年	七年	八年	九年
100	100	100	100	数量	100	100	100	100	100	100	100	100	100
521	491	381	411	價額	521	491	381	411	521	491	381	411	521
5	5	5	5	数量	5	5	5	5	5	5	5	5	5
53	53	53	53	價額	53	53	53	53	53	53	53	53	53
4	4	4	4	数量	4	4	4	4	4	4	4	4	4
57	57	57	57	價額	57	57	57	57	57	57	57	57	57

昭和元年	三年	五年	七年	九年	年次	昭和八年	十年	十四年	昭和元年	三年	五年	七年	八年	九年
200	200	200	200	200	数量	200	200	200	200	200	200	200	200	200
600	600	600	600	600	價額	600	600	600	600	600	600	600	600	600
200	200	200	200	200	数量	200	200	200	200	200	200	200	200	200
400	400	400	400	400	價額	400	400	400	400	400	400	400	400	400
200	200	200	200	200	数量	200	200	200	200	200	200	200	200	200
380	380	380	380	380	價額	380	380	380	380	380	380	380	380	380

一會社・工場

日陶株式会社 陶器製造 資本金八萬圓 開設三十九年八月創立 上組 現存七六
 重役 工井長五郎 藤平秀太郎 櫻本兵次郎 菊本田吉 支配人 田村久平
 東洋砂煉瓦株式会社 砂煉瓦製造 資本金百圓 大正六年九月創立 今八年二月營業
 放神有刀者投資 工学士(留學出身)田中重二氏發明製業 一日生産高約一万 中野隆平
 日本硝化煉瓦株式会社 硝化工場 大正八年三月創立 資本金十萬圓 大正八年三月創立 上組 解散現存七六
 法商株式会社 穀物日用品賣買 資本金十萬圓 大正八年三月創立 上組 解散現存七六
 重役 赤松正茂 藤平慶市 櫻田隆次郎 赤穂梅三郎 江本金伴 岡本乙松 森田新平
 阿萬製菓会社 菓子製造 資本金二萬圓 大正十一年五月創立 上組 解散現存七六

重役 南熊三郎 藤平欣助 宮本孫太郎 赤穂梅三郎 安田左左衛門
南海酒造株式会社 清酒醸造 資本金拾五萬圓 大正十年十二月創立 下組 南海酒造二

重役 土井長五郎 太田重太郎 南熊三郎 前田在三郎 多田利平 久田常吉 中田久吉

岩鼻弥生八 野瀬屋平 末廣森松 榎本昌八

南海酒造株式会社 資本金五萬圓 昭和七年十二月設立

重役 久田常吉 高水菊一郎 多田利平 谷口亀五郎 南熊三郎 赤穂利平 久田義雄

安田惣市 谷口喜三郎 支配人 栗田清一郎

株式会社淡路屋商會 資本金十萬圓 大正十一年四月創立 諸道具加工

重役 榎本兵次郎 安宅重太郎 島田太平 江本正之 江本政次郎 赤穂正哉

森田新平 金一 佐代一

阿高精穀所 精穀製材 資本金 大正九年創立

金一貞平 江本正之 藤平欣助 赤穂梅三郎 榎本昌八

土井貝知製造所 土井長五郎氏経営、大規模ニ經營ナレシモ現存セズ

川原貝知製造所 川原南市氏ニヨリ經營ナレシモ現存セズ

前川貝知製造所 前川善吉氏ニ依リ經營ナル

榎本昌八 榎本光一郎氏ニ依リ

藤原五 藤原熊一郎氏ニ依リ

出田敏工所 出田鴨一氏ニ依リ經營ナル

二、金融會社

株式会社阿高銀行 資本金四萬圓 明治三十年五月創立 大正十五年十月廿一日淡銀合併解散

重役 土井長五郎 藤平孝太郎 榎本兵次郎 島本田吉

淡路實業銀行阿高支店 大正九年設置 大正十五年十月末淡銀合併

支店長 榎本兵次郎 (前身市支店出張所後支店ニ昇格)

淡路銀行市支店阿高派出行 大正十三年八月開設 淡銀合併明銀

所長 榎本寛一

淡路銀行阿高支店 大正十五年十一月一日開設

支店長 野瀬屋平 高岡安太郎 榎田隆次郎 清水光平

淡州野瀬野高代理店 大正十五年十一月開設 店主 清水光平

三、家産財團同盟會

若 幸 大正八年村長兼助氏ハ民々福養事業中時ニ對象主裁ヲ數收シ、大正九年五月二十九日

靜岡縣村長兼助氏ハ山下作義氏等トシテ家産財團ニ關スル講議ヲ開キタルニ端ヲ發ス

大正九年十月十日日彼等據上ニ互長會ヲ組織シ亦成ノ規約草案ヲ配布シ之ヲ設立ノ研究

ヲ求メタルニ清場同意セリ。

大正九年十月十六日村会開催、際同前

大正九年十二月五日ヨリ九日間夜間各部落ニ於テ民力油養實行宗旨宣傳ノ為メ出張ノ際之ガ設立宣傳ヲナレ同前。

大正九年十二月十六日上組公会堂ニ設立相談会ヲ開催、規約草案研究計議、成案ヲ得。

大正十年一月一日設立總會開催、百年計画家産財團形成同盟會設立決定。

大正十年一月廿八日 第一回總會開催 役員選舉

會長 柳孫助 副會長 村居佐平、前部千賀藏 理事 江本金作、銀山惣吉、岸上岡市、大西文次、宮本芳太郎、島本由吉、土井子市、岩鼻弥生八、岸鼻武市、南熊三郎、佐野善之助、阿部幸次郎、阿部三右工門、榎本繁一、池田重藏、池本永吉、榎本和手、榎本龜一 監事 榎田長策、榎本兵次郎、土井長五郎、岡本治一、森本常平、阿部吉代藏、谷口龜五郎、池本須藏、榎勢雪吉、

大正十二年三月二十八日總會 役員改選

顧問 柳孫助 會長 村居佐平 副會長 榎勢雪吉、銀山惣吉 理事 江本金作、前田庄三郎、岸上岡市、大西文次、松本弥平、宮本芳太郎、土井子市、岩鼻弥生八、岩鼻武市、榎本鷹市、佐野善之助、阿部傳作、阿部三右工門、谷口龜五郎、佐古淵太郎、池本常太郎、榎本龜一、藤本徳次 監事 榎田長策、土井子市、岡本治一、南熊三郎、長尾善三郎、阿部吉代藏、岡本長七、山口政市、垣服鶴平、

昭和十年四月一日通常總會 役員改選

會長 銀山惣吉 副會長 榎勢雪吉、榎本繁一 理事 藤手保、安宅重太郎、榎田隆次郎

岸上岡市、堤庄三郎、松本弥平、土井子市、岩鼻武市、岡本治一、南熊三郎、阿部三右工門、阿部傳作、佐古乘太郎、池本常太郎、岡本長七、藤本徳次、赤樫官太郎、山伏藏 監事 岩鼻弥生八、榎田長策、狹間至市、佐野善之助、阿部幸次郎、榎本和手、山口政市、垣服鶴平、榎本常平、

特殊ニ對シ、株券作製交付ノコトニ決定

會員名 (相續人又ハ寄附行為)

甲種 (五万円蓄積) 藤手秀太郎 (保)、榎本兵次郎 (利男)、銀山惣吉、柳孫助 (電)、前田庄三郎、安宅重太郎 (一)、長尾善三郎 (河原松寄附)、木村安太郎 (二)、島本由吉、土井長五郎 (一、二)、松本弥平、水本惣吉、岡本熊藏 (若一)、岩鼻武市、長尾倉藏 (吾三郎)、阿部幸次郎、阿部丑吉 (三右工門)、前部千賀藏、阿部幸平、谷口政次郎、谷口俊五郎、村居佐平 (茂)、榎本龜一、水本〇

乙種 (伊之吉) 榎田照、島田丑三

乙種 (岩鼻岡蓄積) 小原長和、市藤平熊平、榎田隆次郎、山本利市、江本金作、江本正之、江本政二、即末廣又吉、大西運平、榎本光郎、岸上政市、數目廣市、漢神瑞雄、土井子市、山崎官長、初田辰吉、川崎

歌平、岩鼻弥生八、南熊三郎、阿部茂作 (因平)、阿部吉代藏、阿部嘉藏、阿部幾右門、阿部吉次 (牛藏)、阿部三郎、鈴木和市、新田常次、榎本房吉、榎本繁一、岡本義一、坂部直平、赤樫官太郎、榎本和一、

谷川作吉、與津三太郎、榎本陸藏、新田貞市

丙種 (重富岡蓄積) 水廣ゆ、銀山博、山田康、佐渡想太郎 (長化吉)、佐津清、岩山義治、清水光平、

岸上岡市橋本高平、園生又市、在田善吉(鈴大)金一貞平、大西丈次、福田幸吉(甚田郎)北原藤吉、堤庄三郎、前川宇城(幸)江本力太郎(亮介)、岩倉俊太、櫻木庄作(正)江本
 龍市、江本五郎、大西丈吉、松本庄太郎、前川芳平、樺田長策、山本利吉、野孫助(聖)柳增藏、赤根政
 太郎(與市一平)蘇川八郎、櫻本岳八、金一虎平(左平)櫻木幸市(貞)大西忠市、關本清三郎(福平)
 增水富三郎、宮平芳太郎、宮本孫太郎、橋部貞勝(万勝寺)興津多次郎(柳社八幡)樺田照(野社八
 幡)末広ゆい(全七)江本正之(在御軍人會)柳孫助(前高村)扶間王市、扶間唯一、坂本喜平(好雄)
 倉本伊平、輝塚虎三郎(松一郎)江本虎一(榮)數田格郎、江本品平(正雄)橋本萬吉、田中
 和平、村上佐市、佐野善之助、山本守吉、木濱孝吉、濱本鶴市、境幸吉(忠平)蘇本常平、久保順吉、南佐
 市、鈴木岡平、河部長五郎、鈴木又市、河部伴作、河部大五郎、河部朝夫、河部孫六、河部萬藏、河部福太
 郎、新田赤市、岡本長七、濱口繁藏(利市)櫻本倉吉、垣原岩藏(鶴松)出田存太郎、松本孫吉、池田重
 藏、岡本團一、山岡谷太郎(仙太郎)松本平吉、櫻本多七、濱崎藤太郎、田岡忠一、佐台津太郎、村上善
 吉(恒男)里口とも(平八)櫻本田吉(和平)櫻本水平(一男)池本漢藏、池本為太郎、池本永吉、山
 口政市、池本常太郎、班場寅平、安田庄吉、楠木雪吉、櫻本雪吉、工井伴吉、櫻本竹市、垣原鶴平、楠木萬
 藏、興津多次郎(新一郎)中山快藏、櫻本三吉、藤本徳次、興濱長五郎、興濱美和吉(正之)楠木也
 三郎、佐渡金藏(小學校)庄田博吉(秀藏)輝塚盛吉、河部利平

第十三年 昭和十一年度産業統計

百十七和

字項 戸数 産 額 價 額

牛乳	一〇戸	二五〇石	三七七〇円
牛	三〇八	牝 一八一頭 牡 一三九頭	
馬	九三	牝 三九頭 牡 六六頭	
豚	六	一七	
山羊	二	二	
豕	六(六)	牝 七五頭 豕 〇〇頭	六一五
麦稈製品	一二八	二、〇〇〇	
紙製品	二(四)	一、六八	
水製品		五、〇〇〇 六、五〇〇 一、五〇〇	
稲田養鯉	一八場	二五	六〇
稻池其他	一四	二〇〇	五〇
及	一六〇戸(四四九)	九二一〇個	三〇〇、八〇〇
黄製品	四九五	苧 一五〇月 纈類 三三〇 以 俵 九〇〇	三〇月 三〇 其他七、四〇〇
餅菓子	一六〇月	羊菜 八五	
計 一、一九五〇円			

認しつゝ、營々として歩みをつけたり。その間、前記諸氏との懇話より貴
 重なる資料と見受るる御教示を得、又諸氏各位より増大なる御教示を得たのである。
 昭和十二年五月頃より漸次篇毎に完了を見るに至る。關長藤平保闡覽校正の任に當り
 不備なる箇所自ら調査して其完成を期す。初稿又難事業にして、校役役員及小學校職
 員諸氏元保野日長八前原金藏諸氏介担して之に當る。
 昭和十二年十二月より副團長森川定雄高二生徒十三名（北本政文倉本茂、西田春夫赤松
 剛三、中川逸夫、島本英雄、程本博行、山下正巳、菅本勇、濱本芳市、藤本一三、檀本実、園生繁）を督
 し、常々印刷に當り、昭和十三年一月下旬印刷終了、續いて岡本印刷所にて製本を行ひ
 二月吉日發刊の喜を得たり。
 生みの宜みおみ若しを休職した私共は受に生み出せし誠意を以て、味はふと共に之
 が今後の成長を唯一のゆめと見すものなり。

阿萬町郷土誌奥付

昭和十三年二月二十五日印刷
 昭和十三年三月二日發行

非賣品

編輯兼 發行者 兵庫縣三原郡阿萬町本庄上組七九四番地 藤平 保
 印刷者 兵庫縣三原郡阿萬町本庄上組二四番地 森川定雄
 印刷所 兵庫縣三原郡阿萬町阿萬小學校内
 發行所 兵庫縣三原郡阿萬町 阿萬町青年團

380
647

終